

〔巻頭言〕

大学創設から5年目の集積

学長 平山 朝子

大学の紀要は、当該大学の教員による執筆が主となるのは当然であるが、本誌は開学初年度から刊行されてきたので、本巻は大学創設から5年目の教員の研究実績の集積となる。

筆者は第1巻の創刊にあたり、本誌が自大学の特色ある教育研究活動の内実を一層効果的に創出していくために年々充実させたいとの期待を記した。そして、本誌の編集委員会には基本の方針として、教員の本務である大学の諸活動を研究した報告、すなわち教育活動や大学管理に貢献する委員会活動において研究した報告、さらに共同研究活動実績などを大いに取り上げて欲しいと要請した。また、査読に際しては、あまり厳格で形式的な規制をすることなく、教員たちの看護学発展に寄与するための独創的な試みが抑制されないよう留意してほしいとも要請してきた。

その意図は、看護学が発達途上にある学問領域であると同時に、高等教育機関による教育活動実績が乏しい段階にある。そのため、本学が草創期において、どのような研究活動を展開して教育の基盤を造るのか、また、高等教育機関としてどのような管理運営体制を築くのか、これらは本学の今後のあり方に多大な影響を与えていく。

そこで、本学としては、何があっても揺るぎない大学活動の基盤を共同で築いていくことを最優先することとし、大学の構成員が文章表現を通して自分の考えを詰め、共有した。論文として世に問うことを促すことは、教員を育てる原動力となるからである。

すでに4巻を刊行し、内容は所期の目的どおりの成果が確認できる状況となった。つまり、内容構成としては、本学での教育実践事象を取り上げた教育方法の研究、共同研究の実績報告、各種委員会の活動に関わる報告、海外研修報告などが中心であり、毎年の実績が豊かに掲載されている。また、投稿数も多く、1冊に収めることが難しい段階に至っている。

本誌の論文は、総説、原著、報告、資料に区分しているのであるが、委員会の自己点検評価によると、原著が少ないとの報告である。このことは、紀要編集の今後の課題の一つであることには違いないが、むしろ、本学の研究活動自体のあり方に深く関連した課題である。

本学では、たとえば、共同研究については、その要件に看護実践従事者側の問題意識に沿って現地側の課題に取り組むことを重視している。そのため、研究者側の問題意識で現地側の提起した課題を摩り替えるということは慎まなくてはならない。大学の研究者用のフィールドとして協力を求める研究ではなく、対等の立場で問題解決に科学的手法で取り組む。その目指すところは日常的な看護実践の改善・改革に寄与することである。

今後は、これらの実績を積み上げ、集約し、看護サービスの質を変革して行く実践研究方法の開発をしていこうとしている。

すべての共同研究が次段階の研究に発展できるわけではないが、看護サービスの構成の特質に合わせた課題へと発展させる研究も続けなくてはならないし、また、共同学習的取組みを加えて、次段階の共同研究計画が出来てくることが期待できる。こういった側面から、共同研究におけるオリジナリティの追求も可能である。このことは、本学としては、看護実践研究指導を行う修士課程を開設しているという面でも、極めて重要な関心事である。

今日では、学士課程教育の展開を一通り終了し、教育課程の改善・充実に取り組み始める一方で、大学院看護学研究科の教育を開始し、さらに、上記の看護実践研究指導をし得る教育者の育成を目指した博士課程の設置を具体化する時期に来ている。その意味で、本誌の役割の重要性は益々増大して来ている。本学の諸活動の特色を反映した内容の充実を期待している。